

令和2年度岩瀬きゅうり担い手育成事業研修成果報告書

研修生氏名： 吉田 祐大

1 研修動機

これまで農業と無縁であった私が岩瀬きゅうり担い手育成事業研修を受講しようと思ったのは、義父母がきゅうり農家を営んでいたことがきっかけであった。結婚した当初、妻の実家で新鮮な野菜を口にし、その味に非常に感動した。昨今、農業従事者の高齢化や後継者不足問題のニュースを目にすることがあるが、妻の実家も子どもすべてが女性で跡取りがいない状態であった。「このままではこの美味しいきゅうりの味が途絶えてしまう」、「今後もこの美味しいきゅうりを提供し続けていきたい」という思いが強くあり、自ら農業に就くことを決意した。

農業については未経験であり自分に務まるか不安もあったが、市内できゅうり担い手を確保する研修制度を実施していることを知った。就農前に研修等に参加したいと考えていたが、その期間の収入面が悩みであった。本研修では賃金を受け取りながら研修を受けることができ、就農するのであれば慣れ親しんだ須賀川の土地でという想いとも一致し、是非受講したいと思い研修の応募を決めた。

2 研修生となって

(1) 初期

公社業務研修

まず、農業公社にて業務研修開始となったが、農業未経験だった私がまず苦労したのは、専門用語を理解することであった。聞きなれない農業で扱われる機械名や農作業の名称・用語が飛び交い、それが全く分からずメモを取っては調べる日々が続いた。身体面でも苦労した。農業機械全般はもちろん、刈払機ですらも持つことない私は、草刈り作業後は何日も筋肉痛に悩まされた。しかし、どの研修においても指導者・講師の方々は親切に指導してくれ、初歩的な質問であっても嫌な顔ひとつせず答えてくれた。研修が始まって間もなく、不安であった私は、温かみある対応が非常に有難かった。

きゅうり栽培の研修としては、農業普及所が主催する「きゅうり基礎力アップ研修会」から開始した。農業普及所では、きゅうり栽培歴が浅い生産者を対象として、

きゅうり栽培に必要な知識や技術を学ぶ研修会を開催し、きゅうり若手生産者の基礎力向上及び早期取得安定と生産者同士の交流促進を図っている。第一回の研修に参加し感じたことは、きゅうり農家になると決意したものの、きゅうりに対して全く無知であったということである。きゅうりの生育や生理・生態、栽培方法等など知らないばかりで、ここでも聞きなれない専門用語に苦労した。だが早い段階で気付けたことから、以降の研修はさらに身が入る様になり、実地研修前に基礎座学を学べたことは大きな収穫であった。

(2) 中期

ア 露地栽培研修

六月より露地きゅうり栽培研修が開始された。この地域の露地きゅうりの定植時期は五月下旬が多いが、研修先のきゅうり農家では若干遅く、毎年六月中旬頃行うとのこと。きゅうり栽培といっても複数の作型があり、経営戦略的に定植時期を決めたり、他に生産する作物との兼ね合いも含めて最善な方法を決めていたりする必要がある。研修は苗到着して間もなく正にこれからきゅうり栽培が始まっていくところだった。一から学べる貴重な機会であるため、一つ一つの作業を大切にこなしていくことが重要である。しかし、研修を行っていく中で気付いたのは、経験値を積む機会が他業種に関して非常に少ないということだ。他業種では週一回や月一回等の業務が多くある一方、農業では年数回しか行われない作業も珍しくない。したがって、年単位で習熟度を高めていくことと作業日誌等での履歴管理が重要になる。天候面においても毎年同じとは限らず、一定のスケジュールで作業が行えないことが農業の難しいところであると実感した。

このため、従来からの計画ありきでなく、急な天候の変化等にも対応できるよう、常に代替案も頭に入れて作業を行っていくことが、日々効率的に作業を進めることに重要であると感じ、就農後は意識していく必要があるだろうと感じた。

イ 公社業務研修

この時期はきゅうり露地栽培研修が中心で、公社での業務研修は多くなかったが、草刈り作業等を行うことが何度かあった。研修初期に苦戦していた刈払機の扱いも少しずつ慣れていき、自己の成長を実感することができた。

この頃から各種研修会に参加することも増え、農業機械の操作や整備につい

て学ぶことも多くなっていった。どの研修会に参加しても共通して指導されることがあった、農作業安全対策の重要性についてである。農業機械等は扱えば便利な反面、扱いを誤れば大きな事故に繋がってしまう。毎年、必ず農作業での死亡事故が発生しており、多くは何十年も活動してきたベテラン農家である。何事も慣れた頃が一番事故・ケガ等が発生しやすく、研修を通してより一層気を付けて作業していこうと意識するようになっていった。

(3) 後期

ア 露地栽培研修・施設栽培研修

六月下旬より約一カ月に渡り曇雨天が続いた。その影響で日照不足や湿害が発生し、梅雨が明けてからは高温・乾燥、成り疲れ等で草勢が低下し、例年よりも早い時期に生産を終えてしまうきゅうり農家が多かったと耳にした。毎年同じ作業を行うのではなく、天候に応じて適切な管理を行うことが重要になり、その小まめな一つ一つが収穫量に繋がっていくのだろう。今年は例年とは異なる天候であったが、逆に今後同様の天候が発生した際は、どの様な対応が重要であるのか知ることができ、良い経験が出来たと感じている。

露地栽培研修終了後は施設栽培の研修を行った。露地栽培で一定の作業は学んできたが、露地栽培と施設栽培では栽培方法が大きく異なることに驚いた。

研修先の紹介で複数の施設栽培先を見学させてもらったが、同じ施設栽培であっても栽培方法の違いや工夫が見受けられ、ほ場条件や自分にあった生産スタイルを確立していくことが重要なのであろうと感じた。

また、研修先の施設栽培ではハウス内環境制御システムを取り入れていた。ハウス内環境制御システムとは、ハウス内の環境(温度、湿度、二酸化炭素など)を監視し、必要に応じて調節するシステムのことである。従来は作業者が温度計や湿度計を見てハウス内の環境を確認し、換気のタイミングを決めているが、各種センサーやプログラミング可能な設備を活用して自動制御を行うことができる次代的な農業である。前職ではシステム関係に携わっていたこともあり、各業界でのIoT(Internet of Things)やAI(Artificial Intelligence)導入を良く耳にしたが、農業界においても「スマート農業」といったロボット技術や情報技術を活用した技術が注目されている。参加している農業普及所主催「きゅうり

基礎力アップ研修会」の他、「ハウスきゅうり環境制御技術研究会」という勉強会を紹介してもらった。ハウスきゅうり環境制御技術に取り組み生産者同士がデータ等を共有し、何が増収に繋がっているかなどを解析・検討し、互いに助言し合うことで、更なら収量・品質向上を目指している。研修期間中に一度出席したが、参加者は三十・四十代の若手農家を中心である。

就農後は露地栽培から着手していく予定だが、この先、施設栽培を行う場合は是非参加すべきだろうと感じている。自分だけでは得られる情報量にも限りがあり、視野も狭くなってしまう。同年代と意見交換できる環境は非常に重要であり、この様なコミュニティには積極的に参加していくべきだろう。

イ 公社業務研修

きゅうり栽培も終了し、冬季は公社での業務が中心となった。公社が行う肥培管理・収穫・農産加工(蕎麦・菜種・大豆等)を通して、農業全般のスキルアップと知識向上を図っていった。公社受託事業として雪柳の農業研修も行った。きゅうり露地栽培のみでは冬季の収入源が無く、冬季の収入源確保が課題となっている。よって、市内で冬季の作物を経験できたことは大きく、この経験を就農後に活かしていければと思う。

3 研修を終えて(※研修期間全体を振り返って)

当初は不安もあったが、各指導者に恵まれ最後まで有意義に研修に参加することができた。約一年間の研修を通して、農業に関する基本的な技術・知識、精神・身体面で鍛えることができ、その中で地域の認定農業者の方たちと繋がりを持てたことは今後の活動に大きく役に立つだろう。

しかし、きゅうり栽培において数回しか経験していない業務は多くあり、今後、数をこなして習熟度を高めていく必要があるだろう。特に基本となる土づくり関係(耕うん作業や元肥・追肥作業等)の経験が乏しい為、就農後の課題としたい。販路開拓や農業経営学についても勉強が必要である。

研修を終えたここからが本当のスタートとなるだろう。研修で学んできたことを基盤として、初心を忘れず日々のスキルアップに励んでいきたい。

4 就農展望

就農後は、先ず露地栽培できゅうりの生育、生理・生態等をしっかり学んでいくつ

もりである。また、妻の実家では研修で未経験である防虫ネット被覆栽培を行っており、露地栽培と並行して学んでいきたいと考えている。

きゅうりの施設化は、①栽培期間の拡大による収量の向上、②気象災害減少による収量・品質の向上、③病害虫発生減少による殺菌・殺虫剤の削減等、非常にメリットが大きく、最終的には露地きゅうりを施設化させていくことが今後の大きな目標である。

きゅうりだけでなく、他の作物栽培にも取り組んでいきたいと考えている。露地栽培でお世話になった際、指導者の方からの「自分の好きな野菜を作りなさい」という言葉が非常に心に残っているからだ。就農後は、様々なことにチャレンジし、時には壁にぶつかることも出てくるだろうが、研修で学んだ経験と地域との交流を大切にし、生まれ育った須賀川の地へ恩返ししていくことが私の夢である。